

・自選五十首・



道浦母都子

みちうら・もとこ 1947年和歌山県生まれ。早稲田大学在学中「未来」入会、近藤芳美に師事。歌集『無援の抒情』（現代歌人協会賞）『水憂』『ゆうすげ』『風の婚』『夕駅』『青みぞれ』、NHK人間講座をまとめたエッセイ集『女歌の百年』など。現在「未来」選者。

明日あると信じて来たる屋上に旗となるまで立ちつくすべし

神田川流れ流れていまはもうカルチエラタンを恋うことも無き

催涙ガス避けんと秘かに持ち来たるレモンが胸で不意に匂えり

君のこと想いて過ぎし独房のひと日をわれの青春とする

涙ぐみ見つめていれば黄昏をロバのパン屋が俯きて行く

どこかさめて生きているようなやましきはわれらの世代の悲しみなりき

こみあげる悲しみあれば屋上に幾度も海を確かめに行く

生きていれば意志は後から従きくると思いぬ冬の橋渡りつつ

たましいが兵器を越えしベトナムを神話のごとく思い出すなり

如月の牡蠣^{かき}打ち割れば定型を持たざるものの肉やわらかき

野に住みて日々透きゆけるわが身なれ今日水^{みづ}の辺^への草に降る雨

『無援の抒情』

『水憂』

『ゆうすげ』

ここしばらく、河出書房新社から四月刊行予定の全歌集の原稿と向き合っている。

全歌集といっても、一九八〇年刊行の『無援の抒情』から、一九九九年刊の『青みぞれ』まで、二十世紀終了に至るまでの既刊六歌集を収めたものである。「未来」入会が一九七一年だから、約三十年間の作品であるが、一言でいうと、進歩なし。がっかりしながらのゲラ（校正紙）チェックで、この三十数年、何をしてきたのだろうと、反省しきりである。

ただ、自分自身の作品云々^{うんぐん}は別として、短歌作者となつて得た幸せの大きさは、計り知れない。気分が楽というか、うんと長いスタンスで物事を考えられるようになった点、それが、いちばんのよろこびといえる。

わたくしの心乱れてありしとき海のような犬の目に会う
ひとを焼く煙なびける川向こう愛の終わりの後の静けさ

全存在として抱かれいたるあかときわれを天上の花と思わむ
君に妻われに夫ある現世は黄の菜の花の戦ぐ明るさ

如何ならむ思いにひとは鐘を打つ鐘打つことは断愛に似て
ひと恋はばひとを殺むるころとは風に乱るる夕菅の花

今日われは妻を解かれて長月の青しとどなる芝草の上

ころよき澄明ならんコスモスは稚き子の手のひらに似て

産むことを知らぬ乳房ぞ吐魯番の絹に包めばみずみずとせり

水晶橋 雨後を渡れば逢うという時間の中を生きし日のごと

四十代この先生きて何がある風に群れ咲くコスモスの花

水の婚 草婚 木婚 風の婚 婚とは女を昏くするもの

人のよろこびわがよろこびとするころ椰子の花咲く頃に戻り来

遠き電話に酔いて掠るるひとの声運河を溯る海霧を言う

砂時計の天地を交うる一瞬も砂したりて過去となる時間

ネックレス静かに置けば昨日見し台北運河の一縷の流れ

取り落とし床に割れたる鶏卵を拭きつつなぜか湧く涙あり

〈世界より私が大事〉簡潔にただ率直に本音を言えば

夜を来て大観覧車に揺られいる一人のわれに風吹くばかり

うそうそととろけるような春時間 高麗橋に降る春の雨

「風の婚」

「夕駅」

「音みぞれ」

長い歴史を持つ伝統文芸である短歌。私はその流れの中の小さな小さな一雫にしかすぎない。百年までは届かないであろう私の一生など、短歌の歴史にくらべれば、何とちつぽけなことか。そう考えると、今日や昨日といった細事はもちろん、日々、変化する「今」を、うんと覚めた目で見ることが可能だ。

うたの流れは悠久の大河のようなもの。川面近くの水面は、ときによって色彩も形相も、さまざまに変化するだろうが、水面深い流れは変わることはない。ゆつたり、のんびり、堂々と……、何といつても、われわれ作者は、大河の一滴にすぎないのだから。そんなふう
に考えられるからである。

毎年、一年が終わると、今年の一首といえる作があったかどうか、自問自答してみることがあつたりなかつたり。十年単位で考えても、同様である。全歌集の中で、一首あげよ、と言われても、今は、返事に窮する次第。

従つて、ここに選んだ五十首も、現在のところ、私が納得まではいかないが、何とか拾つてもよいと思える作品でしかない。

短歌は、知れば知るほど怖ろしいまで深遠な妖怪のような存在。

さて、一生を終えようとするとき、私は、私の一首、と妖怪さまに捧げられる作品があるのかどうか、いまだもって自信がない。

しづくする木綿豆腐は涙するかの日の誰か 深く思わず

生きるとは夢を断つことおもむろにぼつりぼつりと折る傘の骨

ははそはの母は親馬鹿わたくしのためにのみ泣く南京かぼちゃ

夢見ては夢に疲れて立ちつくす片男かたおの波の抒情するまで

空深く風の道あり古い母を置いて去りたきわたくしのため

夕映えに濡れ消え去る鳶見れば死とは光に吸われゆくこと

音楽のようなるものと死を言えば一夜安らぎ眠りぬ母は

三分粥匙に運びてやるたびに母のくちもと傷のごと開くあ

ぼんやりと見上げる空は幽界のひかりとなりし母の棲むそら

晩白柚ばんぱいゆうひざに抱いだけばまどかなりこの世に在あるとはかたちあること

たとえればひしゃげた葉罐かかろうじて呼吸していし去年のわれは

いま隣りにいるのは誰か白菜のこぼす雫のように笑って

折り畳み折り畳んでも起き直る日傘の骨は戦死者の骨

めくるめく恋に落ちれば哀しみは色褪せゆくか閻魔えんまこおろぎ

秋彼岸 ひとほ地上に香を焚き天はひかりの花びらこぼす

おりからの雨にしぐる馬の瞳よ瞬くたびに白あやめ咲く

肩の力抜いて生きたら此の世とは草木笑そうぼくう朝明野あさけののみち

なんと静かな海よ花嫁がやってきそうな夕映えとなり

悲しみの袋のような影を曳く波打際を歩める兄は